

## 障害を理解するとは？

東北大学大学院教育学研究科 教授  
菅井 邦明

「障害を理解するとは？」という課題を私は極めて複雑な課題と考える。それは「人間にとって障害とは？」という課題と同義とも考えられる。この課題は医療・保健領域、福祉領域、障害教育領域、行政領域等の専門家の中で様々な考察がなされてきた。しかし近年その考察に新しい観点が加えられてきている。それは障害を持つ当事者の意見である。従来は健常者側からの検討がなされた。その過程では「障害受容」という言葉で検討されてもいる。ここでは、始めに健常者側と障害者側の障害理解の困惑例を次に健常者側からそれを乗り越える考え方の一例を示したい。

### 1. 水澤学さんの家庭と家族（親の会記事から引用）

水澤学さんの主張の大意は以下のとおりである。{自分は、家庭そして家族に対して大きな疑問を感じている。自分自身が聾者として生きる決意し、日常生活において、音声言語を必要としないことに慣れた頃から、この疑問は自分の中で大きくなった。母は「聞こえません」「分かりません」「声を出しなさい」と自分に向かって言う。弟は、「手話をやめて」「手話がなくても声だけで分かるから声を出して」という。食事時はいつも父・母・弟が楽しそうに話している。次第に家族との対話をする気持ちが失せてきたことを覚えている。そして家族と話しする事を拒否するようになった。・・・学校も周りの世界は同様だった。聾者と聴者いうだけでこうも苦しまなければならないのだろうか。家族との役割とは？}

このレポートは、音声言語を使用する多数派の健聴者が手話を使用する少数派の聾者を根本的にどのような認識で関わるかという問題を含んでいる。現在では手話も言語であるということが国際的に認められている。しかし聴覚障害教育でも歴史的には長いこと手話使用を禁止した時代がある。音声言語の使用困難な聾者への障害理解が健聴者側の論理で行われ、人間存在を根底から否定するような障害理解が行われた例である。

このような例は、歴史的には数多くあった。それを克服する障害理解の考え方が以下の例にある。

## 2．大江健三郎と息子光さん（新聞掲載記事から引用）

大江は、「若いころ実存主義の文学を勉強した。人生には意味がないと考えるのが出発点でした。だが障害を持つ長男が生まれ、それだけではやっていけないと思った。人間を根本のところから励ます文学、ドフトエススキーやブレイクを読み、息子のことを書き、その方向で仕事をしてきた」。『光の音楽には、彼が言葉では表現できなかった、一人の人間の豊かな表現がある。彼と共に生きた人生を理解できるぞと思えます』と言っている。この言葉から、我々人間は障害があろうが無かろうが、人生に意味を持たせないと生きていけないこと。そして脳障害を言葉で表現できなかった人間の音楽における豊かな表現を発見したことで方の一例であろう。このような考え方は、我々が進む方向を示していると思われる。